

アラン・マクファーレン著

船曳建夫監訳

北川文美・工藤正子・山下淑美訳

『イギリスと日本

—マルサスの罠から近代への飛躍—』

(The Savage Wars of Peace England, Japan and Malthusian Trap)

清水邦彦*

1 本書の概要

まえがき

I 罠 第1～2章

II 平和時の戦略 第3～6章

III 体のなかで 第7～9章

IV 体の上で 第10～15章

V 空気中で 第16章

VI 胎内で 第17～20章

VII 結論 第21章

筆者アラン・マクファーレン (Alan Macfarlane) は、これまで、『イギリス個人主義の起源』・『資本主義の文化』・『再生産の歴史人類学』等の著作で、近代文明発祥地、イギリスの独自の発展を探究してきた。(これらの著作にはいずれも邦訳がある。) その結果、「1990年になると私は、産業革命とそれに関連するさまざまな近代性の諸特徴の起源を説く鍵は、ヨーロッパ大陸から離れたある島国から見られた、経済と政治と親族関係と宗教の、不可思議な組み合わせの内にあるだろうと結論するに至った。」(pp.x～xi)

このような見解を持つ筆者がアジアで「近代化の先頭を切った」(本書帯)日本に興味を持つようになるのは必然であろう。本書は、数度の来日経験のある筆者が、イギリスと日本との類似点を整理した大作である。

筆者は、産業革命の前提として、2つの段階を想定している。まず、第1段階として、適度
※金沢大学文学部助教授

に人口が増加することである。しかし、人口増加は、マルサスの指摘の如く、戦争・飢饉・病気によって、なかなか戒しえない。「まえがき」筆者は、こうした人口抑制を“マルサスの罠”と呼んでいる。(p.7)

“マルサスの罠”から脱出し、人口が増加しても、近代化は起こらない。筆者は以下のように述べている。

資源が増加しても、高い出生率と死亡率の減少による急速な人口増加によりすぐに相殺されてしまうのである。その結果、人口密度は上昇し、死亡率は高まるという負のフィードバックを起こす。このような循環により、長期的な経済成長の持続は阻止された。(pp.18～19)

“マルサスの罠”の第2段階である。(第1章「マルサスの罠」)このような“マルサスの罠”からいち早く脱出し、近代化を遂げたのが、イギリスと日本である。(第2章「二つの島」)

それではなぜ、イギリスと日本が“マルサスの罠”から脱出できたのだろうか。まず、気付く事は、両国の自然環境の類似であるが、筆者はこれを直接的な原因とはしない。(第3章「自然環境・文化・人の労働」)というもの、環境の使い方が両国で相違するからである。

イギリス人と日本人がその環境を利用するやり方はまったく異なっていたことがわかる。イギリス人に関しては、牧農主義の強調と、動物、風、水といった「自然の」力を動力化することによって、産業革命を待たずに、多くの人々が比較的な生活をすることとなった。一方日本では、よりやせた土地で米作で生計を立てる、より稠密な人口をかかえながら、家畜の使用は明らかに少なく、風力や水力はわずかしき用いられないために、肉体労働の負担はますます大きくなり、とりわけ女性がそれに苦しむ、ということとなった。・・・環境は、それだけではほとんど答えを与えることはできないものようだ。(pp.49～50)

そこで第4章から第16章に於て、15～17世紀の両国が戦争・飢饉・病気から免れ、人口が増加した理由を分析している。

第4章「戦争による破壊」では、両国に戦争が無かった理由を、島国という環境条件に帰している。

イングランドと日本に重大な戦争がなかったことは、両国の特異な発展の中心的理由の一つである。それは、それらの島国という位置ゆえに、かなり偶発的に生じたことである。(p.60)

第5章「飢饉の性質・原因とその排除」では、両国で飢饉が起りにくかった理由を分析している。その理由を筆者は、「戦争がないこと、良好な水上交通、多様で先進的な農業、発展した市場経済といった要因の組み合わせ」(p.85)に求めている。

第6章「食事と栄養」では、第5章を補足する意図を以て、当時の両国民の栄養状態が比較的良好であったことが述べられている。

第7～16章では、両国が病気（特に伝染病）から免れることができた理由が述べられている。

その理由として、第1に、純粋な水の供給（第7章「赤痢、腸チフス、コレラと水の供給」）とその煮沸、即ちお茶の飲用が挙げられる。（第8章「飲み物－ミルク、水、ビール、お茶」）

第2に、人糞の衛生的処理が挙げられる。（第9章「人糞処理の二つの方法」）もっとも、処理方法は、両国で異なる。日本では肥料として処理されたが、イギリスでは水洗便所という新方式でなされた。結果的に「日本においてさえ（評者補－イギリスの新方式が）日本式の解決法に取って代わった。」(p.177)

第3に、道路等の公共空間が清潔に保たれ、ハエ等の伝染病を媒介する生き物の発生が抑えられたことが挙げられる。（第10章「病原媒介物による病気－ペスト、発疹チフス、マラリア」・第11章「公共空間－道路、田畑、市」）

第4に、住居・衣服・身体の衛生に於ても、清潔に保とうとする努力がなされたことが挙げられる。（第12章「住居と健康」・第13章「繊維、衣服、履き物」・第14章「身体衛生－入浴と洗濯」・第15章「汚れ・清潔に関する概念の変化」・第16章「空気で感染する病気－天然痘、ハシカ、結核」）

以上の諸理由により、イギリスと日本の両国は、戦争・飢饉・病気から免れ、人口が増加できたのである。

しかし、だからといって、近代化は起こらない。人口が増えれば、資源の増加は相殺されてしまう。（“マルサスの罠”の第2段階）近代化が起こるためには、適度な段階で人口が抑制されねばならない。

それでは何故、両国において、人口は抑制されたのだろうか。その鍵は出生率の低下に求められる。

イギリスに関して言えば、17～18世紀に於ける女性の平均初婚年齢の上昇及び有配偶者率の低下によって、出生率が低下し、人口が抑制されたとしている。（第17章「出生率と結婚・性的関係」）なお、出生率低下の理由として、避妊・中絶は該当しないとしている。（第18章「生物学と受胎調節」・第19章「中絶と嬰兒殺し」）

18世紀の日本に関して言えば、「生涯独身の者がある程度いたこと」・「早い時期に夫婦間の性交渉を停止する場合が多かったらしいこと¹⁾」(p.318等第17章)を考慮に入れつつも、墮胎・間引きを出生率低下の主理由としている。（第19章・第20章「後継者戦略」）なお、間引きに関しては、計画的に行なわれたとしている。

日本で人々を（評者補－間引きへと）動機づけたものは、現存の貧困と同時に豊かさへの欲望であつたらしいことに、当時の研究者²⁾たちは早くから気づいていた。・・・親たちは、家族の規模や構成を調整するべく、非常に意識的に計画し、選択的な間引きの方法を使っていた。

(pp.352~353)

状況は異なるが、両国いずれも出生率低下から適度な段階での人口抑制が起こったため、近代化の先頭を切ることとなった、と筆者は結論付けている。(第21章「意図と偶然」)

2 評者の気付いた点

評者が、本書の書評を思い立ったのは、間引きの記述が発端である。本書の間引きに関する論述は主に、トイバー (Tauber Irene 1958・邦訳『日本の人口』1964) に拠っている。評者が疑問に思ったのは、トイバーの以下の記述である。

四国の土佐では、男の子一人と女の子二人が、生き残ることを許された最大数だった。・・・日向では長男を除いては全て殺された。・・・武士は最初に生まれたものだけを残したと伝えられている。本書p.343・トイバー『日本の人口』p.33)

この記述を一論拠にして⁹⁾、筆者は、間引きが裕福な家でも行なわれていたとしている。(p.353)

このことについて評者の意見を述べたい。周知の通り、江戸時代に於て、武士＝武家と言った方が正確かもしれない。一番の任務は、家の存続であった。現代より医学の劣った江戸時代に於て、幼児は無論のこと、青年になっても病死する可能性は低くなかった。例えば、徳川将軍でさえ、15代の内、7代家継(7才)・14代家茂(20才)の二人は早逝している。まして、下級武士であればなおさらである。

「養子」という方法もあるが、これは誰でも良い、という訳でなかった。養子は、身分制を崩さないため、なるべく血縁者が望ましいとされていた。したがって跡継ぎ以外の男児は、貴重な“補欠”であった。無論、一生“部屋住み”となってしまう可能性はあるが、他家の養子になる可能性も残されている。例えば、江戸時代に於て一世代ごとに三割前後の家が養子で家系

をつないでいくのが通例であったとされる。(水谷三公2000:p.34)。このことから、江戸時代に於て、夭死の可能性が低くなかったこと、並びに養子縁組が頻繁に行なわれていたことが分かる。したがって、子沢山に越したことは無かったし、跡継ぎ以外の男児の進路もある程度保障されていたと言える。女兒についても同様であると言える。女兒は婿養子のための“切り札”であった。また、他家へ嫁入りしたとしても、そこで生まれる跡継ぎ以外の男児は実家の養子候補となろう¹⁰⁾。

無論、武家に於て、間引き等が一切行なわれなかったという訳ではない。例えば、武田正1997:p.111には武家での事例が引用されている。また、土佐の下級武士では、男児がやや多い、という史料が残されている(太田素子1997:p.575)但し、武田の事例は、不義密通を原因とする可能性もある¹¹⁾。土佐の事例も、全42例中、男1人女2人は、1例すぎず、計4人兄弟が3例であり(太田素子1997:p.575)、トイバーの記述とは一致しない。

とすると、やはりトイバーの記述の信憑性を疑わざるおえない。筆者はこの点について、以下の様に述べている。

トイバーの引用文献を確認した日本人研究者(評者補一千葉徳爾¹²⁾)が示唆するように、これらの記述には誤解や誤訳があると言えるかもしれない。しかし、大幅に差し引いても、間引きが特定の時期と地域に行なわれていたという証拠は十分に残っているように考えられる。(p.343)

確かに、1935年頃に編纂された『日本産育習俗資料集成』を見ても、ほぼ全国各県で間引き・墮胎の伝承は確認される。しかし、問題は、トイバーに基づいた筆者の見解の是非、即ち18世紀に於て間引きが人口に影響を与えたかどうか、そして間引きが計画的に行なわれたかどうか、ということである。

この問題を詳細に分析したのが、千葉徳爾・大津忠男『間引きと水子』1983である。千葉・

大津は、まず先行研究の依拠する史料が当事者のものではなく、為政者側のものであり、信憑性に欠けることを明らかにした。

例えば、歴史人口学の研究者が良く引用する書物として、佐藤信淵『経済要録』があり（本書も孫引き・p.336）、それには、以下のようにある。

今の世に当て陸奥・出羽の両国ばかりにても、赤子を陰殺すること年々六・七万人に下らず。（岩波文庫版p.211）

しかし、秋田藩の人口は武士を含め約40万人であり、当時の出生率から換算すると、毎年1万2千人の出産が想定されるに過ぎない。そこから千葉・大津は、この数字には信頼がかけないとしている。本書の依拠する先行研究も大凡為政者側史料に依拠したものである。

そして千葉・大津は、人口分析の基となる、『宗門改帳』では、子供（地域・資料によって異なるが、3才以下～15才以下）が記載されていないことを指摘している。即ち、幼児が病死しても記録は残らないのである。そこから、江戸時代の人口停滞の原因は、伝染病による幼児死亡率の高さ⁹⁴に求められ、間引きもあったことは確かだが、常習ではなく、飢饉等の止む負えない状況でしか行なわれなかった、と主張した。

千葉・大津の説は民俗学ではおおよそ認められてきた。

これに対し、歴史人口学の分野からは、間引きの存在を暗示する意見も出ている。それは、江戸時代に於ける男女の人口比率の違いである。例えば、1750年には、全国平均男1.15：女1となっている。このことは各地域の分析でも一地域によって数値はかなり異なるが—おおよそ当てはまる。これが、1846年になると、男1.05：女1とほぼ適正な比率となる。（速水融1971）これが史実だとすれば、間引き及び間引き禁止令の成果なのだろうか⁹⁵？

問題はこうした間引きが人口停滞の主要原因と認められるかどうか、ということである。歴史

人口学からは、例えば以下のような提言がなされている。

それでは歴史人口学は人口停滞現象の原因をどのように考えているのだろうか。逃散など宗門改帳からの除外人口（子孫の代までの累積を含めて）、遠隔地からの大都市への出稼ぎによる人口再生産力の低下、授乳期間の長さ、男子の晩婚化や地域によっては女子の晩婚化、養子制度の定着が側面から跡継ぎ確保のための多産をくいとめたことなどが、マビキと並んで挙げられている。人口抑制のために個々の地域が選びとった方法は多様であつても、それらが全体として人口抑制を成立させたといえるのであろう。（太田素子1997:p12）

間引きはやむにやまれない状況でしか行なわれなかったとする千葉・大津説と、ある程度、選択的な人口計画と見なす、歴史人口学とは、相違が認められるが、人口抑制の主要原因としない点は共通している。

従って、江戸時代の人口停滞の主要原因を間引きと見る本書の解釈⁹⁶は再考を要すると云える。

これ以外にも個別の専門家が見れば、至らない点は多々あるかもしれない。しかし、本書の意義は、大局的視点で世界史を見直し、近代化の原因を解き明かそうとした点にある。関連する分野の研究者はぜひ一読し、本書を止揚・活用していただきたいと思う。その価値のある本である。

なお、本書は訳書であるが、それと気づかせない程、訳文は自然であり、読みやすい。惜しむべきは、本稿指摘の如くの諸問題を訳注で指摘していない点である。（約500頁の大著のため、頁数の問題もあったかもしれない。）

註

(1)筆者は「恥かき子」などにも言及している。（本書p.311）

- (2)この場合の「研究者」とは、為政者側の立場になった儒者・国学者を指す。したがって、千葉・大津が否定的に位置づけた史料の類である。註(7)参照。
- (3)その他、Smith Thomas 1977・1988 を論拠としている。
- (4)福尾猛市郎1972:p.158・p.175
- (5)武田は、『中典類聚』（『米沢市史資料編2』所収）「出生不取場」に拠っている。同書は、犯科帳の代表例文集であるため、刑罰の内容に関しては詳しいが、何故間引き・墮胎に及んだか、については記述が無い。
- (6)本書注（83）を念のため引用する。「波平博士から受けた教示によると、千葉徳爾がトイバーによる引用について確認作業を行い、その正確さについて疑問を呈している。」（p.436）
- (7)例えばトイバーは本庄栄治郎・高橋梵仙に拠っている。例外は第19章に引用された佐賀純一『田舎村の肖像』である。念のため、引用すると、以下の様にある。「暮らしが苦しいから、間引きなんぞもいくらかあったんだな。そこで、赴任して来る巡査次第で間引きの具合が違ったなんて話があるぐれいだ・・・ゆるい巡査が来るつつと、どんどん間引いちまうなんて具合で、学校の生徒の数が巡査が変わったときに境に、急に増えたり減ったりしたなんてことがあったんだ。」（本書p.344）但し、巡査という言葉から分かる通り、明治時代の聞き書きである。
- (8)『間引きと水子』に引用されていない史料を念のため、補足する。Jones 1926には、以下の様にある。「病気や栄養失調で1歳未満のものの多くが命を奪われ、また多くのものがそのあと死んだ。館越のある部落では、20人の子供のうちたった3人だけが12歳に達した。」（但し、未公表の博士論文なので、Robert J.Smith&Ella Lury Wiswell 訳書版1987 pp.44~45より孫引き）・なお、H.O.ローテルムンド1995などから、本書の、伝染病が幼児

死亡率に与えた影響は小さかったという論述は再考を要する。

- (9)例えば、現代と比べて、お産により死亡する確率が高かったことも考慮すべきであろう。杉立義一2002:p167
- (10)江戸時代の人口停滞の原因を間引きに求めることは、マクファーレンに限ったことではなく、既にSmith Thomas 1977・1988・Susan B. Hanley & Kozo Yamamura 1977・La Fleur 1992 などにも見られる。マクファーレンは主にSmithに拠っている。（但し、全面的に賛成している訳ではない。本書p.344）・La Fleur 1992に関しては清水邦彦1994・新田光子1995参照。

参考文献

- Jones Thomas Elsa 1926 "Mountain folk of Japan" Unpublished Ph.D.dissertation, Columbia University→未発表のため、評者未見
- La Fleur 1992 "Liquid Life" Princeton U.P.
- Robert J.Smith&Ella Lury Wiswell 1982 "The Women of Suye Mura" University of Chicago Press→河村望・斎藤尚文訳1987『須恵村の女たち』御茶の水書房
- Saga Junichi 1990 "Memories of Silk and Straw" Kondansya→佐賀純一1993『田舎村の肖像』図書出版社
- Smith Thomas 1977 "Nakahara, Family farming and Population in a Japanese village" Stanford U.P.
- Smith Thomas 1988 "Native Sources of Japanese Industrialization" California U.P. →大島真理夫訳1995『日本社会史における伝統と創造』ミネルバ書房
- Susan B. Hanley & Kozo Yamamura 1977 "Economic and Demographic in Preindustrial Japan" Princeton U.P.→速水融・穂本洋哉訳1982『前工業化期日本の経済と人口』ミネルヴァ書房

Taeuber Irene 1958 "The Population of Japan"
Princeton U.P.→毎日新聞社人口問題調査会
訳『日本の人口』1964 毎日新聞社人口調
査会
速水融1971『徳川後期人口変動の地域的特性』
『三田会雑誌』64-8 pp.67~80
H.O.ローテルムンド1995『痘瘡神』岩波書店
福尾猛市郎1972『日本家族制度史概説』吉川弘
文館
本庄栄治郎1930『人口及人口問題』日本評論社
鎌田浩1988『武士社会の養子』(大竹秀男・他
編『擬制された親子-養子-』三省堂)
pp. 61~90
水谷三公2000『江戸の役人事情』ちくま新書
新田光子1995『書評 "Liquid Life"』『宗教と社
会』1号 pp.105~109
恩賜財団母子愛育会1975『日本産育習俗資料集
成』第一法規出版 *1975は出版年代であ
り、編纂は1935頃。
清水邦彦1994『水子について』『比較民俗研究』
9号 pp.172~180
杉立義一2002『お産の歴史』集英社選書
高橋梵仙1941『日本人口史之研究』三友社
武田正1997『子どものフォークロア』岩田書院
千葉徳爾・大津忠男1983『問引きと水子』農山
漁村文化協会

(新曜社 2001)

福井勝義・新谷尚紀 編
『人類にとって戦いとは 5
イデオロギーの文化装置』

小松大介*

2001年9月11日、ニューヨークの世界貿易セ
ンタービルに2機の旅客機が突入した。この事
件は、同時多発テロとして、テレビを通じて昼
夜を問わず、全世界に報道された。オサマ・ビ
※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科前期課程

ン・ラディンを首謀とするアルカイダのメンバ
ーが、旅客機をハイジャックする事で、自分か
らとも突入をかけるという我々を驚愕させる方
法で行われた。この事件により、アメリカは、
首謀者であるオサマ・ビン・ラディンを擁護す
るアフガニスタンに対して報復活動を行ってき
たのは周知の事である。これに触発されるかの
ように、イスラム社会のアメリカに対する不満
が噴出し、パレスチナにおける自爆テロの数も
増えていった。身を以て打撃を与えるこれら
のテロ活動の実行犯は、一部で神格化され、自
ら志願する若者が後を絶たないという報道がな
された。

わが国でも、「アジア・太平洋戦争」におい
て、戦争における死に絶対的な価値を与え、国
民を戦争に駆り立てていき、数々の悲劇を生み
出していった。戦争を体験した事が無い私は、
これらの事実を客観的にしか体験する事ができ
ないが、本書は戦争におけるイデオロギーをテ
ーマとし、「アジア・太平洋戦争」下における
研究者の動向・戦争における「敵」の設定・戦
争へと導入するイデオロギーの形成を通して、
戦争とは何か?という問題を我々に提示してく
れるものである。

本書は次のような内容で構成されている。

序 イデオロギーの文化装置が描きだすもの
福井勝義

第I部 戦争と学問の姿勢

- 1 後藤守一の「日本精神」論 春成秀爾
- 2 弥生文化と日鮮同祖論 藤尾慎一郎
- 3 戦争と柳田民俗学 新谷尚紀
- 4 歴史認識・戦後民俗学・ナショナリズム
吉田品

第II部 戦争にみる「我ら」と「彼ら」

- 1 「朝敵」という語の成立 高橋昌明
- 2 16世紀末の対外戦と降参 一いかにして